

文藝

山清し

齋藤慎吾

身延文庫古文書傳寫の爲、立正大學の派遣を以て吾れは昭和七年六月より同十年六月に及ぶ
満三ヶ年を身延山久遠寺に淨居しき。

1 山寺元旦

靄もや白く罩こめてひそまる山々の尾根おねをし見れば明け動きつつ
禮らい法ほつ華け一會いちゑ無言の座に燃えて燭しよくはかすかに音たててをり
讀よみなれし法華經なれど文もん々の韻ひんは深く今朝の身に沁む
そそりたつ杉の秀はむらの真白雪山やまはさやかに明け放れたり
鳥が鳴く常陸の國のふるさとを一目ひとめわが見む山いただきに
山頂に立ちてはるかに老いらくの父母ことほげば涙ぐまじき
元日はしづかに過ぎぬまなかひに富士大きくぞ夕かげり來し

2 山中淨居

朝夕の勤めさびしく身を置きて淨らに住めば心安けし

本讀みに疲れたる眼を窺た選か見放ちければ赤き南天
 老樹はつかに支へて疎そなり白梅の花すがと朝霞せり
 小雀ら飛び立つなべに杉山の花粉流れて陽にけぶる見ゆ
 咲き光る鬱う金こん櫻ぎんの花の搖れいのち思へばさびしきものを
 さるすべりしんみりと紅あかし朝じめる庭の木の間の茅か蜩たのこゑ
 山まゐりの人らゆくゆくうつ太鼓ひびきは高く天に牙かえたり

3 山を下る

身延にて朽ちむぞよしと思ひにき仰ぐ高嶺たかは今日も雲ゆく
 うつしみの吾がいこふべきところなしひそかに出でて山を仰ぐも
 卑怯なるインテリの性さがは陰にして同僚どうおとしいれ己れ生きむとす(在京)
 幼きゆただに勵みて薄命はくめいのままに吾が生なは終るならむか

4 元朝登詣

窓近くひびく川音明けそめし空かと思れば月傾きぬ
 山々の迫る峽間かひにおりたちぬうつともなし照るおぼろ月
 杉の秀はの霜やけなごみしづかななる北へ身延の嶺ねろつづきたり
 眼を閉ぢて思へば見えしこの山の晨あしたの庭に今われは立つ

白 虎 隊

岡 村 敦 正

をさならがいのちひたすら朝明けの山路越ゆるとしはぶきもなし

(明治元年八月二十二日)

精根盡きゆくを冲天の焰赤々と斯くは死すべきいのちなりけり

(全八月二十三日飯盛山上自刃)

まつしぐらに七夜さを未だ暮進れると便り絶えしは母ののたまふ (弟)

明日は前線にたつといふ弟の便り強きことのみ書きて短かし

父も母もいまさねばひとり耐へつつにをさなき胸は病みたまひけむ

(悼 静 子 様)

三十にして血壓すでにたかしとふおのれしみじみじめにをりぬ

ワツセルマン氏反應陰性といふ看護婦のこゑすがすがうべなひあたり

(血液検査)

姓名判断観る人ありてひとつ處に吾の落付かぬ性は言ひしも (流轉)

嵐

六月二十九日横濱女子師範グラウンド崩壊罹災者を善行寺に收容す

嬰子を抱ける腕のしらじらと夕べ冷たき軀に對す (出征兵の妻)

避難民にをとめ交れりしかすがに歸りゆけるをさびしみにけり

嵐雨なごりなくして木立梢沁み入る丘の松蟬のこゑ

コーラスの流れよどまぬ聲ありて青々と空は晴れにけるかも

鶴見工場街を往く

大機械唸りたちくる朝明空おびただしくも陽ににぎりたる

母を思ふ

小 林 學 山

常日頃親に對し強情で不孝者であつた私も、病氣になつて初めて親の恩を知つた。醫者も博士も見離した大病人を思を引き取る臨終の際迄助けようとするのが肉親の親の心であらう。私が臥つて以來父と母は全く氣狂ひの様になつて了つた。育てた吾が子は次から次からと死んで了ひ、最後に残つた私を「此の子だけは」と士官學校卒業の日を待ち焦れて居た父母、學校も途中で死の床に苦しみ悶く私の姿を父母は何と眺めたであらう。あれ程すきな晩酌を決然と止めて薬代に替へ、又九大の博士の來診を乞ふ爲には二百圓近くの大金を投げ出す父であつた。多久村の民間薬が効くと教へられてはその晩の内に六里の夜道を厭はず買ひ求めて來る母、いよいよ病勢が募つてあらゆる醫藥も駄目だと悟つた時「此の上は神様にお縋りするより他に道なし」と

大資本ここにゆりいでて晝も夜も人の神經はおびやかすなる
大機械どもす聞けば宗教てふ理念もつひに遠き思ひす
小鳥さへこゑに鳴かなくひねもすを煤煙よどめるこの街空は
宗教家てふ思索もなくてひと日けふ軍需工業の衝に疲れし
眞夏日に萎へ盡したるものの翳。青稔栗の色おとろへす

わ か れ

まみ涼しき妹ゆゑにひめしおもひさへすべなく山を明日去なむとす
淡雪の光のなかに立ちなげく妹ゆゑ耐へむ心くづれつ
はかなかる思ひにふたりあるさへや枯葉は山に音たてりけり

○

電報を受けしたまゆら召集とこころ決めにけり祖母死にたまひし
祖母上を逝かせまをして身の不精の悔なしとならず一の孫われ

續 岡山に遊ぶ

道路標識朽ちかたむけり赭土のこの山路は吉備につづくかも
岩影をたたへて深き青淵に木々の紅葉の散るしきりなさ
背戸庭に柿の熟れ實をちぎりつつ戦さに死にし次郎思ひをり
日もすがら疊表を織りつつに村の處女はさびゆくならむ
おのがじし蓄へきそひ親しまぬ村人らなりなかに吾が住む
さむざむと遠山しぐれ夕づくを蘭田打ち人ら未だ歸らず
蘭田水をかくるモーターの音とどろひびくに寒き十三夜月

かねて靈驗灼かと聞いて居た川上の寶塔
様へ三年間跣足詣りの大願をかける母で
あつた。一口に三年さいふものゝ雨の日
も風の日も嚴寒凍る雪の日も三時に起き
て水垢を取り、往復五里の山道を跣足で
詣る母、これを理窟で解決することが出
來ようか。身を捨て、たゞ一途に我が子
助け給へと神に捧ぐる一念凝つて立つる
大願、何で他人が立て、くれよう。肉親
の親なればこそ。噫、併し何といふ皮肉
であらう。私の病氣は日に、重くなる
ばかりだつた。私は幾度死生の境をさま
よつた事か。

忘れもしない昭和六年の春四月、釋迦
如來御降誕ましましし花祭りの祝日だつ
た。午過ぎ何時もの如く勤務先から歸つ
て来た父は枕元へ坐つて、「氣分はどう
だ、苦しいか？」と尋ねてくれるのであ
つた。「阿父さん。私も後二三日持つま
いと思ひます。生きて居た間親不孝の數
々本當に済みません。此の世の御別れに
御經の聲を聞いてそれを便りに冥途へ行き
たいと思ひます。何卒坊様を連れて来て

朝明けの田の面の薄氷割りつつに蘭植ゑす人らはやありにけり
戸を開けてすなはち向ふ枇杷の木の花しらじらと朝しぐれ空
茶の花は冬陽のなかにうす甘し小蛇らあまた下ごもりつつ
風がはこぶ雪さらさらと朝庭は萬両の實の赤かりにけり

隣家の糶摺る音のひびきつつ午すぎてよりの曇りぬ

春日光照りしづもれる瀬戸の海の未だも寒し青き潮騒(國立公園鷺羽山三首)
磯山の木の間ゆたてる千鳥かも高くは飛ばすこゑすくみ鳴く

うらうらと麥生明るく照り和みすでにしひばり高鳴けるなり
ひさしくを大忠の微望達せずとおのれ厳しく説きすすめつつ (日蓮上人)

勅語奉讀にも居眠れる多しうつつとなにを夢みるこの人らども
霜け田の水に照りしむ日のぬくさ蘭草は青く芽にたちにけり

植ゑつけしちさはまろ葉の顯たぬ間に吾れ岡山を去るべかりけり(三月十日)

煩悩讃歌

後藤龍子

ひたすらな昂に驅られ歩む道さるすべりは紅く花咲きてをり
さるすべりの紅き花瓣に燃えつきて我執さながら陽は照れりけり
思念いまに對へるものを超えにけりカンナの花の血ともゆる晝
咲き照れるカンナの花にむきたちて美を認めしはいつよりなるか
日没の照り衰へて風吹けりうつつとおもふわが肉體に
日ならべて降る雨寒く秋に入り聾者のごとく夜々をこもりぬ
空罐に花植えて愛で育くむは趣味ならねども樂し朝朝

下さい。」と言つた時父は兩眼から涙を
はら／＼と流して、「そうか。そんな
に悪いのか。よし暫らく待て、今すぐ本
行様に御願して来るからな。」それから
物の一時も經たない内に父は本行寺上人
を伴つて歸つて來た。上人は酸素吸入を
して居る私の衰弱しきつた姿を見て驚か
れた様子であつたがやがて御經を訓讀で
靜かに讀み始めた。今迄母の信仰を馬鹿
にして居た私も此の時ばかりは泣かずに
居られなかつた。この御經を便りとして
冥途に逝かなければ他に便るものとてな
いと思ふと上人の御經の一聲々々が全身
に滲みわたるのであつた。「妙法蓮華經勸
持品第十三……」

此の經文の意味、それは今を去る三千
年前、大聖釋迦牟尼佛が印度に仰入滅の
際御弟子方を集め給ひ「汝達よ吾久しか
らずして世を去るべし。されば吾がなき
後に我に代りて如來の使となり三惡道の
衆生を教へ導きてその苦しみを救ふは誰
ぞ。」と尋ね給ひしとき。藥王菩薩、樂
說菩薩その他御弟子の方々が世尊の御前

大輪の菊冷々と咲きてあれ齒を磨ぎつつも唇つめたかり
朝々を散る花あればおのずから生きゆく意識きびしかりけり
蓮池に蓮の花咲く清らかな朝の目覺めを欲りて久しき
冬枯れの山のへに佇ち濃濫の海見ておしが悔となり來つ
夜の庭を歩む仕様なぞすべもなし他郷の山に圍まれてゐて
閉まりし部屋に香をこめて藥草を煮をれば寒き霜夜にも似き
樹々の葉の様に散る冬にむきすまじく心荒るゝ思ひす
郵船俱樂部の屋上を今し離れたる眞晝の月は海にかたぶく

夏秋山麓居詠草

石川國武

初夏のけはひとなりしこの夜ごろ肌をぬぎては風にふかるる
杉むらにたちこむる霧木の間ゆも這ふとこそすれわがゆく道に
霧ふかみ水戀鳥の聲絶へし靜寂のみちをわけは歩みつ
かなかなのこゑ親しもよ松ケ枝に暮れなすむ陽のひかり残れる
棕栢の葉にふく風ありて動かざる山の上の雲のゆゆしきをみつ
わたる日に空は照りつつ山の邊に凝る雲見れば炎暑おもほゆ
窓の邊の楓にふきくる風をさへうれしみ思ふ暑き家居に
夕ぐれの明るみにして廣原に遊ぶ童らが見ゆ旗うち振りて
すかし見るすだれの外はすがすがし照りわたる月の白く光るも
夕づきし深山の森に鳴く蛸の聲まれになりぬ夏ゆくらむか
夕づきし葡萄の棚にふさぶさと垂るつぶら實の靜けさに居り

に進み出て「お釋迦様決して御案じ下さるなよ。如來なき後二千年。末法濁惡の世とならば、吾等必ず佛の使となり慈悲の衣に堪忍柔和の袈裟打ちかけて命を的に法を説くべし。大難も來らば來れ。世の爲一切衆生の爲捨つる命、など惜しからん。吾はこれ佛の使なり。衆の前に恐るゝ處なし。」といふのが此の經文の意である。何といふ強い力のある言葉だらう。つら／＼世間を眺むるに生あるものは必ず死す。尊きも賤しきも皆この道理から逃れる事は出来ない。定められたる運命の前には全世界の權勢を以つてしても、千萬無量の金力を以つてしても一分時の壽命すら伸ばす事が出来ない。生老病死の苦しみは何人も絶対に逃れる事は出来ない、生れ乍らに背負つて來る運命なのである。どうせ死ななければならぬいとすんならば短かい生涯を、親を苦しめ世を呪ひ地獄に墮ちてかくも苦しみに悶えつゝ死んで行くよりは、此の御經に書いてある様に、いつそ佛の使となり人を救ふ爲に命を捨てた方がどれ程幸福であ

現世は今日もかなしや亡き母を偲びて心泣かんとするも（命 日）
曼珠沙華は毒なりと叱へどきかばこそつみとり居りし幼妹世になし
豫備少尉林是幹先生召集されこの峽の町きほひたちたり
みまかりし防人の母ならむ白木の箱抱き来る人老ひましておぬ
松虫の窓邊にきたりなきたつる夜はしみじみと思ふ事多し

拾ひ屑 一束

東

菑

庭隈の紅き山茶花咲き初めて寒き曇りを四十雀の來る
くぐもりの夕べさむしく山茶花にひつそりと來て鳴くみそさざい
山並みのはたては晴れてすむ空に八ヶ高嶺の雪ぞ光れる（下部街道）
ひとひとり通らぬれば椋の樹に雀はさわぐうるさきまでに
ひそまりてものの音たへし夜の湖にうつる三日月光鋭く
夜の湖は遙く寂けし吾が佇てる汀を洗ふ波もあらなくに
朝霧の林をとほし窓に入る陽すぢはずでに秋づきにけり
冬の陽のとどかずなりて庭隈の山茶花のはなは散りしきてあり
深霜は日にけにきびし庭への雨天の實は朱味そめたり
風のしづみし夕べ裏山に落葉をさむく踏む鳥のあり
ここに來て心ひろらなり富士川の蛭鮫として白き一すぢ
雪霧のふかくたちこめ見もわかぬ谿間にぞ來て鳴く鳥のあり
曾つて師が住まひし釋迦堂今はなくて夕陽に淡く咲く胡蝶花の花
胡蝶花の花むらがり咲ける崖なだり夕日あかるくしばしを照らす

つたらうと今になつて悔悟の涙がさんぜんとして枕をぬらすのであつた。

死に行く我が子の枕下で父母はゞ茫然自失してつくねんと坐つたまゝ、手を合せて上人の御經の聲を聞いて居た。恐らくこれが此の世の最後の別れであらうと父母の顔を見上げた時あれ程肥つて居た父が今は六十の坂を越えて瘠せ哀へ、見るも哀れなおいばれ爺になり果てて居る母は雪より白い白髪頭。噫、此の老ぼれた父と母を残して死んで行つたなら、後に残つて父と母が何を便りに暮すだらう。

「噫阿父さん、お母さん。悪うございました。今日迄親不孝の数々。二十三の春。今こゝで私が死ぬといふ事を知つて居たなら、あなたに親不孝するのではなかつたのに、それは皆私に信仰心がなかつたからです。何卒お許し下さい。もう私はあの世へ旅立たなければなりません。死んだなら一度御釋迦様の御膝下へ行つて、立派な御弟子となり今度この世に生れて來る時には必ず真心こめて親孝行を

夕陽あかあかと落葉松林に照れる時ながくは鳴かぬ春蟬のこゑ
 小夜更けを地震に目ざめてふとも聴くむさびの聲は谿を越えつる
 海ゆ昇る陽の明るさよ昨夜ひと夜雷は鳴りしが梅雨あくらし
 十四五の少女の唇に紅そめて暗きに恥じり客にも言ふ（巷）
 これがめらは生活の爲に媚賣りて己れ醜く馴れゆくらしも
 磯砂を踏めばにじみ來水音のすがすがしもよ朝日を浴びにつつ

叙景雜原不退

やはらかにたそがれそめし山並のみ雪の映へは愛しかりけり
 なよなよとうすくれなひの花ゆらぐ合歡の梢に夕あかりして
 あかねさす深草百合の山かげにひかげこもりてひぐらしのなく
 窓下のにびひろごりしかんぼちやのかたちとゝのひしもの七八つも見ゆ
 夕ざれば生き咲きそふ白粉の花の紅ひ美しみ見つ
 種熟れしこれが大き向日葵に轟たのしげに來鳴きつればむ
 雲ひくゝさ霧の如にながれゆく山がひの街のあかつきよろしも
 きり小雨降りふかみつつまのかぎりおぼろけぶりて木立見へずも
 さらさらと又さらさらと群れて舞ふ落葉かなしも秋の風吹く
 ゆかしくもこれが賤家の軒にして菊咲きさけり大きな花して

御廟所

とほつ世に大きひじりの住みませしみあとおろがむ胸はせまりつ

致します。その時こそこの御經に書いてある様に一切の欲惡煩惱を捨て去つて佛の使となり命を捨て、衆生濟度に盡しませう。馬鹿たつた故に犯した此の世の罪を何率許して下さい。」と私は心の底から後悔するのであつた。

思へば昭和三年の春四月已來跣足詣りの願を起してから丁度滿三年目、今日こそ大願成就の日である。母の子に對する心、それを思ふと胸がはりさけるやうだつた。「さうだ此の年老いた父母の爲に斷じて死んではならぬ。それに今日は四月八日だ。」私は腹の底から湧き起る不思議な大勇猛心をむら／＼と感じた。病何者ぞ！私は床を蹴つて起きた。恐らくその時であつたらう。永年私を苦しめた病魔が朝霧の如く消失せたのは。

一切の魔を破して天晴地明、見る森羅万象盡く如來の慈光に浴して和氣溢れ、世は皆希望に燃えて居る。かくて後、病も癒えて私は父母の許しを得て髪を剃り佛弟子となり、今は身延の聖地にあつてありし日の先哲の死身弘法の尊き御生涯

さゝがにの糸玉つらぬみ庵のありしむかしを慕ひおろがむ
たへだへにつたふ懸樋に水波みつみさはにせりつむひじりとほとし
夜もすがら要文誦持の聲たへぬとほきみ世こそ慕はしきかな
ぬかずけば胸ちにせまるちからありみたまは今もこゝにいませり

戦傷の弟に

なりたちし醜のみ盾のいたつきに哀れ伏すてふ吾れかはらめや
すめらぎの防人汝れの今にして白妙の姿おろがむ吾れは
大君にささげし生命ながらへて白妙につゝむ赤きこゝろを

野菊

母そばの母めでませし一本のま白き野菊はこゝに咲けるに
ま白なる野菊手折りてとみこうみ心しめやかに母を慕へり

俳句

若葉明るう雨過ぎてゆく山の晝
花菖蒲朝をきほひて鯉の群
團扇つかふ音のみに更けて床の暗
蠶の匂ひこもりて峽の村十戸
明けて行く堂うそさむし燭のゆれ
谿に架す長き廊下や夕紅葉

嫩葉子

黒宮教文

をしのびつゝ行に學に一意精進を續けて居るものである。それにしても思ひ起すもの、眼に日夜浮び来るものは父母の姿である。川上川の上流風光清き處、日親上人血染の寶塔、清正公槍先の題目の靈蹟地寶塔山の拜殿正面に喜びの涙拭ひつゝ、我が母が報恩感謝の赤誠こめて寄進した一尺五寸の大馨子、その銘に曰く、
「豚兒儀、陸軍士官學校在學中胃下垂症を患ひ、その後更に肺結核、肋膜炎、腹膜炎、脊髓カリエスを患ひ病床に呻吟する事三ヶ年その間死に直面する事前後九回、時に昭和三年四月八日斷然身命を捨て、法華經を信仰し三年跣足詣りの大願を立て神佛の加護を乞ひ奉りしに一念感應ましませしか大願成就の日病魔忽ち退散したるを以つて謝恩の爲馨子一個寄進し奉るもの也
昭和六年四月四日 施主小林みつ子 寶塔山主寶藏寺學進代」
母は死すとも寶塔山の聲の名の存する限り母の愛は永へに世に輝くであらう。

— 完 —